国際日本研究センター NEWSLETTER

ニューズレター 東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/icjs/

International Center for Japanese Studies

2018.10 No.23

○夏季セミナー・サマースクール院生発表会 2018 報告 Report : Summer Seminar, PhD Students Workshop 2018……P1
○国際日本語教育部門「多様化する日本語教育－日本語教育の現場の声を聞く－」第 1 回研究会 Diversifying Japanese Language Education – Voices from Practitioners" The 1st Research Seminar……P2
○比較日本文化部門「女性をターゲットとした戦後日本の自動車広告――社会規範の変化の観点から」"Post-War Japanese Car Adverts Aimed at Women from the Perspective of Changing Social Norms" ……P3
○対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 25 回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 25th Research Seminar…P3
○対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 26 回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 26th Research Seminar…P5
○比較日本文化部門 講演会 「Korean monks and Ottoman dervishes: Globalized Orientalism between Japan and Turkey」……P6
○ 2018 年 4 月～ 2018 年 10 月 活動報告 Activity Report（Apr.2018 － Oct.2018）……P7

夏季セミナー・サマースクール院生発表会 2018 報告
Report : Summer Seminar, PhD Students Workshop 2018

2018 年 7 月 11 日 (水) から 13 日 (金) までの 3 日間、夏季セミナー 2018「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」が開催されました。国際日本研究センターが主催するこの夏季セミナーは今年で 7 回目を迎え、国内外から多くの参加者が集いました。

＜孫建軍氏＞

夏季セミナーでは、海外の諸大学で日本語研究、日本の文化・社会研究を牽引する第一線の講師 7 名と現在国際日本研究センターが受入れている博報財団の研究者 2 名（中国・ウクライナ）を迎え、国際日本研究センターの講師陣とともに、充実した講義が行われました。今年はこれまでの東、東南アジアの研究者に加え、新たにロシア、東欧（ポーランド、ウクライナ）地域の 3 名の研究者による講義も行われました。

＜マイヤー氏＞

講師の詳細は以下のとおりです。

孫建軍氏（北京大学）中国、朱秋而氏（国立台湾大学）台湾、金鍾德氏（韓国外国語大学）韓国、リム　ベンチュー氏（シンガポール国立大学）シンガポール、スタニスワフ　マイヤー氏（ヤギェロン大学）ポーランド、ナジェージダ　ウェインベルグ氏（イルクーツク国立総合大学）、梁青氏（厦門大学）中国、オリガ　ホメンコ氏（キエフ・モヒーラアカデミー国立大学）ウクライナ、アサドチフ　オクサーナ氏（キエフ国立大学）ウクライナ、峰岸真琴氏、鈴木智美氏、逆井聡人氏（東京外国語大学）日本

＜朱秋而氏＞

さらに、サマースクール研究発表会も同時開催されました。日本で学ぶ大学院生 35 名、タマサート大学（タイ）・シンガポール国立大学（シンガポール）・韓国外国語大学校（韓国）・中央大学校（韓国）・北京大学（中国）・北京外国語大学（中国）・東海大学（台湾）・国立台湾大学（台湾）・国立政治大学（台湾）・ヤギェロン大学（ポーランド）・イルクーツク国立大学（ロシア）・キエフ国立大学（ウクライナ）の 13 名及び、開南大学（台湾）からも 1 名の大学院生が参加しました。国内からは本学の大学院生のほか、国際基督教大学、筑波大学、明治大学の大学院生も研究発表を行いました。この報告者 49 名にのぼるワークショップも今年で 6 回目を迎えます。昨年度に続き、今年度も司会、タイムキーパーともに学生による自主運営の形式を取りましたがこれも成功し、報告後は例年より活発な質疑応答がなされました。

＜リムベンチュー氏＞

＜オクサーナ氏＞

その後の大学院生の懇親会には 80 名ほどが参加し、会場のあちこちで人の輪が出来、今後、国際日本研究を担ってい

＜ウェインベルグ氏＞

く若手研究者同士が親しく交流しました。また、海外の講師を囲み、熱心な議論と歓談の場も持たれました。

セミナーの延べ参加者数は 12 コマで約 460 名、4 会場で行われた大学院生によるサマースクール研究発表会の参加者も延べ約 700 名を超え、その数は年々増加しています。最終日にはサマースクール修了式も執り行われ、海外から参加した大学院生に修了書が手渡されました。さくらホール前での記念撮影の後、大学院生たちはそれぞれの場での研鑽と再会を誓い、名残を惜しみつつ帰国の途につきました。

＜金鍾徳氏＞

（坂本惠）

＜懇親会の様子＞

The 2018 Summer Seminar "Language, Literature, Society: A Constructive Approach to International Japanese Studies" took place July 11th-13th, in conjunction with a Summer School with presentations by students from home and abroad.

The summer seminar began in 2012 and is now in its 7th year. Lecturers provided stimulating, detailed presentations on ongoing research in the fields of language, literature and sociology (including education and history). This year, 3 lectures and 3 graduate students from Poland, Russia, Ukraine were newly invited to the events. This year also marked the 6th holding of the Summer School, with 49 graduate students presenting their research. 13 participants attended from universities outside of Japan, 1 from International Christian University, 2 from Tsukuba University, and 4 Meiji University. Both the Summer Seminar and the Summer School featured lively question and answer sessions.

(SAKAMOTO Megumi)

国際日本語教育部門「多様化する日本語教育－日本語教育の現場の声を聞く－」第 1 回研究会
"Diversifying Japanese Language Education – Voices from Practitioners" The 1st Research Seminar

国際日本研究センター国際日本語教育部門主催研究会「多様化する日本語教育－日本語教育の現場の声を聞く－」第 1 回研究会が 9 月 21 日（金）14：00 ～ 16：30 アゴラグローバル 3 階プロジェクトスペースにおいて開かれた。

現在日本語教育は、地域、対象、目的、学習者、教師などさまざまな分野で多様化している。多様化している現場の状況を知るために、さまざまな日本語教育の現場のいろいろな立場の方をお招きし、日本語教育の現状を知ることを目的とした研究会を今後連続して開きたいと考え、その第 1 回目として、お二人の方をお招きした。本学名誉教授である小林幸江氏は「TUFS オープンアカデミー日本語指導者養成プログラムの現状と課題」と題し、日本語教員の養成講座とは別の枠組みでの「指導者養成プログラム」の立ち上げについて経緯や現状、そして問題点について報告した。

＜小林幸江氏＞

日本語教育の現場の多様化と同時に求められる指導者も多様化し、またそれを目指す人々の多様化という現実のあることが示された。また、教育の場とは別の視点、立場から、世界中で最も多く使われている初級教材「みんなの日本語」シリーズを含む日本語教育関係の教材を多数出版しているスリーエーネットワーク出版で編集を担当しておられる佐野智子氏に「教材編集の現場から見た日本語教育」についてお話を伺った。佐野氏はスリーエーネットワークで出版してきた教材とその時代の要請、潮流について紹介した後、現在、日本語学校の急増、教師が増えるに従い、求められるものも変わってきているという現状について報告した。その後 20 名ほどの出席者も含めて自由に、そして活発な意見交換、情報交換が行われた。

＜佐野智子氏＞

（坂本惠）

ICJS International Japanese Education Division held the "Diversifying Japanese Language Education – Voices from the Classroom" research seminar 14.00-16.30 on September 21st in the third floor project space of Agora Global. Japanese language education is currently diversified according to area, target, purpose, learner and teacher. In order to learn about this diversity, speakers from a variety of teaching environments were invited. On this occasion, TUFS Professor Emeritus Yukie Kobayashi presented "The Present State and Issues Concerning the TUFS Open Academy Training Program for Japanese Language Leaders". Tomoko Sano, editor at 3A Corporation, which publishes numerous Japanese language education resources, presented "Japanese Language Education from the Editor's Desk". It is hoped that further research seminars will be held in the future, for the purpose of learning what is happening in Japanese language education on the ground.

(SAKAMOTO Megumi)

比較日本文化部門「女性をターゲットとした戦後日本の自動車広告――社会規範の変化の観点から」
“Post-War Japanese Car Adverts Aimed at Women from the Perspective of Changing Social Norms”

●日時：2018 年 5 月 24 日（木）17：45 ～ 19:15
●場所：研究講義棟 419 号室 語学研究所
●発表者：オリガ　ホメンコ氏
キエフ・モヒーラアカデミー国立大学人文学部歴史学科准教授。
国際日本研究センター特任研究員

＜オリガ　ホメンコ氏＞

自動車は高い社会的なステータスの象徴でありながら〈男性的な〉象徴でもある。女性向けの自動車マーケティングは、日本ではいつ始まったのか――雑誌広告のうえでは 1950 年代後半にはじまる自動車会社の女性に対する関心を、そのときどきのレジャーや女性のステータスとの関係を読み取りながら示す。いわば戦後日本社会史において、経済的発展と消費文化の関係、女性の社会規範を考慮しつつ、女性の「幸せ」をめぐる広告研究という視角を提示することに、オリガ・ホメンコ氏の報告の意義があった。

博報財団のフェローシップとして来日したホメンコ氏の研究テーマは、「幸せを求めて――戦後日本の婦人雑誌広告と女性」である。まず「幸せ」をメディア研究のテーマとすること自体に斬新さがあるが、それはそれに対応した研究方法の確立を必要とする。多くの場合、女性の幸せはジェンダー研究が主要な課題としてきたのであり、それをメディア研究の側で切り取ろうとするものだからである。そこでホメンコ氏は、十分なデータ収集を研究課題とした。その作業の一環として報告されたこのワークショップで提示された、ホメンコ氏の見通しとは以下のようなものである。・1948 年から 1979 年における女性像の変化が 4 つの段階で起きたこと、・高度成長と共に物質主義的な「幸せ」モデルが形成されたこと、・1970 年代後半から戦後の「幸せ」モデルが揺らいだこと、である。こうした結論を、ホメンコ氏は、日本の高度経済成長という物語に単純に還元していない。

「幸せ」の概念は、時代、経済環境、自然被害などの影響を受けて、移ろいやすい。「幸せ」は個人的であると同時に集団的な概念であり、個人の美的道徳的価値であると同時に規範的である。豊富な自動車広告の資料を用いながら示されてきた女性の表象は、必ずしも単線的ではない「幸せ」をめぐる物語の広がりと収束をよく表すものであった。

（友常勉）

＜会場の様子＞

The concept of “happiness” changes easily, influenced by the period, economic environment and ecological damage. “Happiness” is at once communal and personal, both normative and an individual aesthetic and moral value. Portrayals of women in the abundant records of car adverts reveal the complex spread and convergence of narratives about women’s “happiness”. Cars are a symbol of high social status but also of “manhood”. Dr. Olga Khomenko explained the appearance in magazines in late 1950s Japan of car adverts aimed at women, in relation to leisure activities and women’s status at the time. Her advertising research explored women’s “happiness”, and the connection between economic development and consumer culture, in post-war Japanese society.
（TOMOTSUNE Tsutomu）

対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 25 回研究会
“Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 25th Research Seminar

●日時：2018 年 7 月 7 日（土）14:00 ～ 18:20
●場所：研究講義棟 419 号室 語学研究所
●発表者・講演者と題目
・「くちあたりの音象徴の言語相対性と普遍性：コイサン事例研究」
中川裕氏（東京外国語大学）
・「質感探索に着目した新造語の認知言語学的分析」
宇野良子氏（東京農工大学）
・「言語音が生み出すイメージ：音象徴の身体的基盤」
篠原和子氏（東京農工大学）

「くちあたりの音象徴の言語相対性と普遍性：コイサン事例研究」
中川裕氏（東京外国語大学）

本発表は、コイサン諸語に属するグイ語の「食べる」を意味する動詞に見られる通言語的に珍しい特徴の報告をしながら、音象徴の説明原理について論じたものである。

グイ語には、「食べる」を表現する 2 種類の基本動詞「（肉を）食べる」と「（肉以外を）食べる」に加えて、食感動詞と呼ばれる 3 2 種類の特殊動詞が認められる。この語彙化パタンが通言語的に珍しい特徴である。特に後者の食感動詞には、さらに、類型論的に極めて稀少な音象徴が観察される。

一般的に音象徴の説明は、音響的観点および調音的観点からなされるが、前者に比べて後者の説明原理は、未だに発展段階にあると言える。この文脈において、グイ語の食感動詞の事例は音象徴の調音による新しい説明原理を示唆する。

グイ語の 32 種類の食感動詞の形式を観察すると、語基の重複と声調型が共通している。また語基の内部構造を観察すると、常に 2 拍から構成され、第 1 拍が音象徴領域、第 2 拍が文法関与領域と分析することができるさらにここで注目すべきことは、

中川氏の分析によると、第１拍における「円唇母音」は「口を閉じて咀嚼することが期待される食品テクスチュア」という意味と強いつながりを持つ。つまり、そこには「音」と「意味」とのリンク、すなわち音象徴が認められる。さらに、中川氏の解釈によると、この音象徴は、円唇母音が持つ「円唇性」（＝「口唇狭窄」）と食べる際の動作が持つ「閉唇咀嚼性」との調音器官的類似性から説明することができる。これは、従来報告されたことのない、調音的動機付けを持つ音象徴とみなすことができる。（降幡正志）

「質感探索に着目した新造語の認知言語学的分析」

宇野良子氏（東京農工大学）

認知科学の観点から広く言語と心の関係を考察している宇野氏の発表では、「質感探索」が新語の形成において果たす役割に焦点を当てながら、言葉の形の質感を探索することによって新しい言葉が作り出されるメカニズムの考察が、３つの事例研究を通じて、なされた。分析では、特に、伝統的な言語学の分析手法である、作例に基づくミニマル・ペアの考察を超え、仮想テクスチャを表す臨時オノマトペの実験や、大規模コーパスを用いたウェブ上の新動詞の分析手法が示された。以下、３つの実験の概要を記す。

一つ目の事例研究は、「お煎餅の硬度とオノマトペ」である。米菓の食感を表すオノマトペを考察対象として、バリバリ、パリパリ、サクサクといったオノマトペとそれらが表す煎餅の堅さの度合いに注目して、想像食の食感は食体験に基づいていないことを実験によって示した。この研究は、私たちが米菓を思い浮かべるとき、食体験より慣習的な知識（食文化）が影響している可能性を示唆している。

二つ目の事例研究は、「仮想テクスチャを表すオノマトペの臨時度と確信度」であり、新語に注目して、新しい言葉やカテゴリーがいつできるかを論じている。ここでは、新しい事物の出現と新語の関係を捉えるため、視覚的な仮想テクスチャを新しい事物として用いて、そのテクスチャを形容するため、どのような臨時オノマトペが使われるかを実験により調査している。結果として、仮想テクスチャの中でも、判別に能動的に触れることを要し、有生性と結びつきやすいテクスチャが新しい言葉で表現されやすいという点を明らかにした。

三つ目の事例研究は、「新動詞の成立にみる意味と形の変化の相関—『ファブる』の分析から」である。ここでは、ウェブコーパスを用いて新動詞である「ファブる」の成立と意味変化を考察している。大規模なウェブアーカイブを収集したコーパスの分析によって、商品名であるファブリーズから派生した動詞である「ファブる」が現代日本語にある程度定着すると同時に、所格交替を起こす点を明らかにした。

なおいずれの研究も認知言語学、認知科学、自然言語処理などの研究者との学際的な共同研究である。用いられた事例はすべて身近なものばかりであり、改めて言語研究の素材は身近にあり、また、身近にある謎を解明するのが言語研究のあるべき姿と認識させられる発表であった。（大谷直輝）

「言語音が生み出すイメージ：音象徴の身体的基盤」

篠原和子氏（東京農工大学）

篠原先生は、はじめに、音象徴についての主要な先行研究を紹介された。高母音 /i/ は小さいイメージ、低母音 /a/ は大きいイメージと結びつき、共鳴音はまるいイメージ、阻害音はとがっているイメージ、有声阻害音は汚い、無性阻害音はきれいなイメージを持つなど、一定の研究成果がある。一方これまでの実験研究から漏れているものとして、動きを伴うダイナミックな事象と音象徴との関連や、自己の身体動作の経験と言語音との関係などがある。これについて、スポーツ科学研究者と共同で行った３つの実験を紹介された。

１つ目は、スクリーン上の「動き」を見て、その名称を被験者に CV-CV-CV の３音節構造の単語を創作してもらうという実験である。その結果、直線・鋭角的な軌道には阻害音、曲線状の軌道には共鳴音がより多く使われたことから、言語音と「動き」には音象徴的関係があることがわかった。

２つ目は、実際の身体の動き（自己受容感覚）に対しても同様の音象徴関係がみられるかどうかという実験である。「マニピュランダム」装置を使用し、同一の軌道を描くが加速度が異なる２つの動きを実現し、手の動きとして体験させ、それを表す単語を被験者に創作してもらった。急激なスピード変化を伴う動きには阻害音が多く使われ、スピード変化のないスムーズな動きには共鳴音がより多く使われた。ここから Motion-Sound Symbolism（動きの知覚と言語音が結びつくこと）を実証した。

３つ目は、異なる力の強さを感じさせるスポーツ動作の画像を見せ、音の判断と力の判断をさせる実験である。大きな力で行う動作と有声阻害音、小さな力で行う動作と無声阻害音が無意識内で結びついていることが示され、身体動作における力のイメージも音象徴的連想をもつことがわかった。

これらの研究は、ソシュール以来言われてきた言語記号の「恣意性」の反例となるもので、音声・音素はそれ自体で意味（イメージ）を持ちうることが実証されるという大変興味深いお話であった。（谷口龍子）

NAKAGAWA Hiroshi “Linguistic Relativity and Universality in the Sound Symbolism of Taste in Khoisan Languages” Kalahari Hunter gatherers (so-called Bushmen) widely distinguish verbs for eating through the linguistic coding of taste from the sensation in the mouth when consumed. Ideophones related to sound symbolism play an important role here. This linguistic domain, in which the physical experience of food in the mouth is

lexicalized, sheds light on the issues of linguistic relativity and universality. **UNO Ryoko (Tokyo University of Agriculture and Technology) "A Cognitive Linguistic Analysis of Neologisms Focusing on Investigating Texture"**The presentation focused on the role "investigating texture" plays in words, in particular the mechanisms by which people create new words by investigating the texture of the shape of words, by means of experiments on nonce onomatopoeia expressing imaginary textures and web-based analysis of new verbs. **SHINOHARA Kazuko"The Images Created by Speech Sounds: The Physical Basis for Sound Symbolism"**Research into speech sounds has shown that these do not have a neutral image. Why, then, do speech sounds relate to a particular image? The presentation introduced a series of experimental research showing that the underlying principal is physical.

対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 26 回研究会
"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 26th Research Seminar

●日時：2018 年 10 月 6 日（土）14:00 ～ 17:50
●場所：研究講義棟 419 号室 語学研究所
●発表者・講演者と題目
①「なぜ「これやあれや」と言わないか：日本語とジンポー語の並列表現」
倉部慶太氏（東京外国語大学）
②「英語教育学における課題解決型言語活動の必要性
―ドリル・練習からタスク型活動へ― 」
髙島英幸氏（東京外国語大学）
③「体言とそれに関る現象への総合的なアプローチの提案」
アルカディウシュ　ヤブオニスキ氏（アダム　ミツキェヴィチ大学）

「なぜ「これやあれや」と言わないか ： 日本語とジンポー語の並列表現」　倉部慶太氏（東京外国語大学）

ジンポー語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、ミャンマー北部などで用いられている。本発表は、ジンポー語の並列複合語における構成要素の順序がどのような規則により決定されているかについて論じたものである。ここでいう並列複合語とは、「金銀」のような類義的、あるいは「前後」のような反義的な対語を続けて構成される複合語のことである。

本発表では、まず早田輝洋氏による対語の音韻階層に関する論考（1977 年）に基づき日本語の並列複合語の順序決定要因について紹介を行ない、続いて倉部氏のフィールド調査による豊富なデータに基づいてジンポー語の並列複合語の順序に関する詳細な分析結果を提示した。並列される要素の順序は、日本語では各要素の長さが同じ場合には音韻階層による配列で８割強の説明がつく一方で種々の意味的要因も作用するという。それに対しジンポー語では意味的な要因は各要素の配列には関与せず、要素の短長、要素内の母音の狭広が順序の決定に非常に強く作用する。

加えて、英語やその他の言語についても言及し、並列複合語あるいは類似の現象に見られる順序決定の規則には共通性が見られるが、そのうちどの要因が強く働くかは、日本語では意味的要因が強いのに対しジンポー語では音韻的要因が優位であるなど、言語ごとに異なりうると考えられる。

並列複合語の語構成が個別の言語にとっても通言語的にも非常に興味深いことが示され、また倉部氏の緻密な研究の成果が、ジンポー語研究のみならず類型論にも大いに寄与することが強く感じられる発表であった。　（降幡正志）

「英語教育学における課題解決型言語活動の必要性―ドリル・練習からタスク型活動へ― 」　髙島　英幸氏（東京外国語大学）

次に、本学大学院総合国際学研究院の髙島英幸氏による、「英語教育学における課題解決型言語活動の必要性―ドリル・練習からタスク型活動へ―」というタイトルの発表が行われた。

髙島氏は、英語教育において理論よりも実践を重視するタスク活動の概略を紹介された。解説の際には、高校での実際の活動の例を映像を用いて紹介したり、授業で配布する材料を実際に配布されたりして、非常に具体的でわかりやすい解説が行われた。

高校においてドリル・練習で英語の型を生徒の頭の中に形成させること自体は重要なことであるが、多くの高校の現状はその段階で止まっているのが問題であり、結果が最初からわかっている練習に対して、コミュニケーションの相手が変わると結果も変わるタスク活動が極めて重要であることが述べられた。何を学ぶかに加えて何ができるようになるかとどのように学ぶかを重要視している次期学習指導要領は、課題解決型授業の実践と完全に一致していることも指摘された。

実際に英語の事例として、現在完了形と過去形の相違点の問題、仮定法と直接法の問題、後置修飾語の語順をいかに定着させるかという問題など、具体的な事例を提示しながらのタスク活動の紹介は非常にわかりやすく興味の尽きない議論であった。発表後の質疑応答においても、現役の高校の教員の方からの質問も出たりして、充実した意見交換が行われた。　（三宅登之）

「体言とそれに関る現象への総合的なアプローチの提案」
アルカディウシュ　ヤブオニスキ氏（アダム・ミツキェヴィチ大学）

ポーランドのポズナニにあるアダム・ミツキィエヴィチ大学・東洋学講座准教授のアルカディウシュ・ヤブオニスキ氏は「体言及びそれに関連する現象への総合的アプローチの提案」と題する講演を行った。

一般言語学では、無変化の語幹（意味形態素・詞）と接辞（文法形態素・辞）の付着により総合的な語形が構成される現象を膠着現象と定義する。しかし、通常膠着語に分類される日本語では、語形の概念自体に関する学術的な関心が依然として乏しいとヤブオニスキ氏は指摘する。さらに、特に体言現象に対しては、形態論上の研究方法よりもむしろ意味論上・統語論上の研究方法が適用される例が一般的であるが、形態論研究の観点から考えるなら

ば、総合的語形の日本語に対して孤立語・分析的語形の文法記述が頻繁になされている状況は、不自然なことであると言う。このような現状に対しヤブオニスキ氏は、意味論上・統語論上の現象は形態上の対立により記述するという立場に立ち、体言の語形の整理を通じて日本語体言現象の体系性を明示しようと試みた。その際、「は」「も」「こそ」なども含む全ての連体格辞を対象として「主格」（ゼロ指標）、「題格」（N は / なら）、「指格」（N が / こそ / だけ / ばかり...）、「中格」（N も / さえ / でも...）など 15 種の「格」と、それらを実現する約 40 の「指標」（は、なら、が、こそ、だけ、も、さえ、と、や、など... まで、までに、へ、から、より）をリストアップし、体言語形の全体像を見渡すという方法を提案した。このような方法により、日本語教育への応用や他言語の体言現象との比較に適用する可能性が開けるということも示した。

講演に対して、「が」「を」「に」などと「は」「も」「こそ」などを一括して扱うことのメリットとデメリットなどについて活発な議論が行われた。（成田節）

KURABE Keita (TUFS) “Why we do not say “that and this”: Parallel Expressions in Japanese and Jinghpaw”Parallel expressions in Japanese, English and Jinghpaw do not necessarily match in terms of word order, but common rules (short-long, narrow-wide, word type etc.) can be observed at a more abstract level. **TAKASHIMA Hideyuki (TUFS) “The Necessity of Problem Solving Language Activities in English Language Education – From Drills and Practice towards Task-Based Learning”** The focus in English education needs to be shifted away from textbook-based to more task-oriented and problem-solving activities. Students need opportunities to think for themselves and to express themselves creatively. They also need to understand the purpose of their efforts. They will be much more motivated once they feel a necessity to use the language. **Arkadiusz JABŁOSKI (Adam Mickiewicz University) “A Proposal for a Comprehensive Approach to Non-Declinable Words and Related Phenomena”**Past descriptions of the agglutinative language Japanese have used isolating and analytic word forms. This research proposes a comprehensive method of researching declension, focusing on phenomena concerning non-declinable words.

比較日本文化部門『「Korean monks and Ottoman dervishes: Globalized Orientalism between Japan and Turkey」

●日時：2018 年 9 月 28 日（木）18：00 ～ 19:15
●場所：本部管理棟 2F　中会議室
●発表者：エドヘム　エルデム氏
　　ボアズィチ大学、コレジ・ド・フランス　教授
●コメンテーター：友常勉（東京外国語大学）
　　岩田和馬（東京外国語大学　博士後期課程）

エドヘム　エルデム氏

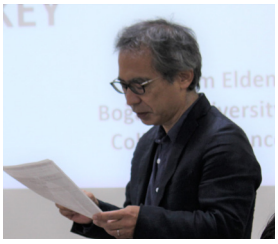
近代トルコの外交官・考古学者、そして成功した画家でもあったオスマン・ハムディ・デユの画業をたどりながら、オリエント内部のオリエンタリズムを検討する。

この目的のもとでおこなわれたエドヘム・エルデム氏のプレゼンテーションは、ハムディの画業が、考古学的な画像やテキストなど、多様なレファレンスのパッチワークから構成されており、そうしたレファレンスを通して、オリエンタリズムを再構成するというプロジェクトにきわめて自覚的であったハムディの企てを、大胆かつ繊細、そして緻密な論証によって示すものであった。たとえば代表作の『亀と男』（1906 年）について、亀を調教する道士について記述されていた朝鮮のテキストとイメージがこの作品のレファレンスであることを実証的に明らかにしたその手続きは圧巻であったが、興味深かったのは、オリエント内部からオリエンタリズムの言説を創造することが、なにゆえかくまで自明化されていたのかということであった。

エルデム氏の論証は、私たちに、オリエンタリズムとは出口のない言説であるという深刻な感慨を残した。イスラームとの関係からいえば、ハムディそのひとは、やはり代表作のひとつである「ミフラーブ」（1901）では、妊娠している女性（ハムディの娘とされる）は、イスラーム関係のテキストを足下に敷いている。それはハムディとイスラームとの距離を示すひとつの主張である。このようにハムディとはイスラーム的というよりも、西洋文明・文化を享受した西洋的なトルコ・ナショナリストであったが、オリエンタリズムの生産については、きわめて自然なマナーでそれを遂行しているのである。

岩田和馬氏

ワークショップでは、そうしたハムディを、当該時期のトルコの諸階層の動向と照らし合わせて報告した岩田和馬氏（本学博士後期課程）、およびハムディと同様の実践を遂行したと位置づけることが可能な岡倉天心のオリエンタリズムについての報告（友常勉）が、エルデム氏の研究を浮かび上がらせる目的で、あわせておこなわれた。トルコ研究にとどまらない普遍的な文化史・社会史研究の見事な実例をみせていただいたエルデム氏に感謝するとともに、サイード以降のオリエンタリズム研究の実相を肌で感じることができる、貴重な時間であった。（友常勉）



Edhem ELDEM (Boaziçi University, Collège de France) considered Orientalism from within the Orient by tracing the achievements of Osman Hamdi Bey, a modern Turkish diplomat, archaeologist and successful painter. Hamdi’s art was as patchwork of various references including archaeological images and texts. The presenter showed daringly and with care and detail how Hamdi deliberately reformed Orientalism through such references. In the workshop, **Kazuma IWATA (TUFS PhD student)** presented on Hamdi in relation to the various societal trends in the Turkey of his day, and Tsutomu Tomotsune presented on the Orientalism of Okura Tenshin who can be said to have followed similar practices to Hamdi. These presentations served to emphasize Professor Eldem’s research. (TOMOTSUNE Tsutomu)

2018 年度 活動報告（2018 年 4 月～ 2018 年 10 月）　Activity Report（Apr. 2018- Oct.2018）

■講演会・ワークショップ等■

●５月 24 日（木）比較日本文化部門　ワークショップ
発表者：オリガ　ホメンコ氏（博報財団・国際日本研究フェローシップ招聘研究者、キエフモヒーラアカデミー国立大学）
●７月７日（土）対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 25 回研究会門
中川裕氏（東京外国語大学）、宇野良子氏、篠原和子氏（東京農工大学）
●７月 11 日（水）～ 13 日（金）国際日本研究センター主催
夏季セミナー 2018「言語・文学・社会」―国際日本研究の試み」
講師：
孫建軍氏（北京大学）中国
朱秋而氏（国立台湾大学）台湾
金鍾德氏（韓国外国語大学）韓国
リム　ベンチュー氏（シンガポール国立大学）シンガポール
スタニスワフ　マイヤー氏（ヤギェロン大学）ポーランド
ナジェージダ　ウェインベルグ氏（イルクーツク国立総合大学）ロシア
梁青氏（厦門大学）中国
オリガ　ホメンコ氏（キエフ・モヒーラアカデミー国立大学）ウクライナ
アサドチフ　オクサーナ氏（キエフ国立大学）ウクライナ
峰岸真琴氏、鈴木智美氏、逆井聡人氏（東京外国語大学）日本
※同時開催
「サマースクール院生研究発表会」
７月 11 日（水）～７月 12 日（木）14:20-17:30
●９月 21 日（金）国際日本語教育部門主催　「多様化する日本語教育－日本語教育の現場の声を聞く－」第１回研究会
小林幸江氏（東京外国語大学　名誉教授）、佐野智子氏（スリーエーネットワーク出版編集者）
●９月 28 日（金）比較日本文化部門 主催　講演会　「Korean monks and Ottoman dervishes: Globalized Orientalism between Japan and Turkey」
講師：エドヘム　エルデム氏（ボアズィチ大学、コレジ・ド・フランス）
コメンテーター：友常勉氏（東京外国語大学）、岩田和馬氏（東京外交後大学　博士後期課程）
●10 月６日（土）対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 26 回研究会門
倉部慶太氏、髙島英幸氏（東京外国語大学）、アルカディウシュ　ヤブオニスキ氏（アダム・ミツキェヴィチ大学）

■ *Lectures and Workshops* ■

● ***Thur. 24 May 2018 : Comparative Japanese Culture Division Workshop "Post-War Japanese Car Adverts Aimed at Women from the Perspective of Changing Social Norms"*** by Olga KHOMENKO (National University of Kyiv-Mohyla Academy)
● ***Sat. 7 July 2018 : "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 25th Research Seminar*** by Yutaka NAKAGAWA (TUFS), Ryoko UNO, Kazuko SHINOHARA (Tokyo University of Agriculture and Technology)
● ***Wed-Fri, 11-13 July 2018***
10:10-14:10, Summer Seminar 2018 "Language, Literature, History: Constructive Approach to International Japanese Studies"
by SUN Jian Jun (Peking University)
JU Chiou-Erl (Taiwan University)
KIM Jongduck (Hankuk University of Foreign Studies)
LIM Beng Choo(National University of Singapore)
Stanislaw MEYER (Jagiellonian University)
Nadezhda WEINBERG (Irkutsk State University)
LIANG Qing (Xiamen University)
Olga KHOMENKO (National University of Kyiv-Mohyla Academy)
Oksana ASADCHYKH (National Taras Shevchenko University of Kyiv)
Makoto MINEGISHI, Tomomi SUZUKI, Akito SAKASAI(TUFS)
※Associated event Summer School 2018
"Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies"
14:20- 17:30 Wed. 12 -Thur. 13, July , 2018
● ***Fri. 21 September 2018 : International Japanese Education Division "Diversifying Japanese Language Education – Voices from Practitioners" The 1st Research Seminar*** by Yukie KOBAYASHI (TUFS, Emeratus Professor), Tomoko SANO (Editor at 3A Corporation)
● ***Fri. 28 September 2018 :Comparative Japanese Culture Division "Korean monks and Ottoman dervishes: Globalized Orientalism between Japan and Turkey"*** by Edhem ELDEM (Boğaziçi University, Collège de France), Tsutomu TOMOTSUNE (TUFS), Kazuma IWATA (TUFS PhD Student)
● ***Sat. 6 October 2018 : "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 26th Research Seminar*** by Keita KURABE, Hideyuki TAKASHIMA (TUFS), Arkadiusz JABŁOSKI (Adam Mickiewicz University)

■今後の活動予定■

●12 月１日（土）国際日本語教育部門「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第４回研究会
ファム ティタインタオ氏、張正氏（東京外国語大学　博士後期課程）
●１月 25 日（金）国際日本語教育部門 「多様化する日本語教育」第２回研究会
嵐 洋子氏（杏林大学）
●２月８日(金)　対照日本語部門共催　研究会「台湾の「日本語人」ナラティブ・データの分析」
張月琴、謝豊帆（国立清華大学）、林淑璋（元智大学）、森口恒一（静岡大学）、谷口龍子（東京外国語大学）
●２月 22 日（金）シンポジウム「国際日本研究と日本語教育－『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』私はこのように使っている」
キタハラ聡美氏（ブラジル・リオデジャネイロ州立大学）、李婷氏（日本大学）、清水由貴子氏（聖心女子大学）、内田正俊氏（埼玉県立川越高等学校）、伊集院郁子氏、鈴木美加氏、野本京子氏（東京外国語大学）
●２月 23 日(土) 国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性（その２）―中南米―」
小那覇セシリア氏（アルゼンチン・ラプラタ国立大学）、キタハラ聡美氏（ブラジル・リオデジャネイロ州立大学）
●３月２日(土)　対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 27 回研究会
加藤晴子氏、投野由紀夫氏（東京外国語大学）、前川喜久雄氏（国立国語研究所）

■ *Future Events* ■

● ***Sat. 1 December 2018 : International Japanese Education Division "Research on Japanese Compound Verb and Japanese language Education from Multiple Languages" The 4th Research Seminar*** by Thithanhthao PHAM , Zheng ZHANG (TUFS PhD Student)
● ***Fri. 25 January 2019 : International Japanese Education Division "Diversifying Japanese Language Education "*** by Yoko IGARASHI (Kyorin University)
● ***Fri. 22 February 2019: Comparative Language Division co-host Research Seminar "Nihongo-jin" Narratives in Taiwan and its data analysis"*** by Yueh-Chin CHANG, Feng-Fan HSIEH (National Tsing Hua University), Shu-Chang LIN (Yuan Ze University), Koichi MORIGUCHI (Shizuoka University), Ryuko TANIGUCHI (TUFS)
● ***Fri. 22 February 2019: Symposium "How I am using '29 Ways to Travel Back to Japan: Japanese Studies and Japanese Language Education'"*** by Satomi KITAHARA (Universidade do Estdo do Rio de Janeiro), Ting LI (Nihon University), Yukiko SHIMIZU (University of Sacred Heart, Tokyo), Masatoshi UCHIDA (Saitama Prefectural Kawagoe High School), Ikuko IJUIN, Mika SUZUKI, Kyoko NOMOTO (TUFS)
● ***Sat. 23 February 2019: The International Symposium "Potential for the Next Generation of Japan Research: Latin America (Argentina, Brazil)"*** by Cecilia ONAHA (National University of La Plata, Argentina), Satomi KITAHARA (Universidade do Estdo do Rio de Janeiro, Brazil)
● ***Sat. 2 March 2018: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 27th Research Seminar*** by Haruko KATO, Yukio TONO (TUFS), Kikuo MAEKAWA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

発行　東京外国語大学国際日本研究センター
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/icjs/